
RELIEVER

咲良帆春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RELIEVER

【Nコード】

N3000L

【作者名】

咲良帆春

【あらすじ】

目覚めるとそこは見知らぬ世界だった

人々が忽然と姿を消した見知らぬ町の廃墟で目を覚ました伊織^{いおり}は、自分がここに至った経緯も分からぬまま食料を求めて街をさ迷う。そして荒廃した街で伊織の前に現れたのはあり得ないものだった…。

某ゾンビ映画^{ゲーム}を彷彿とさせる荒廃した世界で目覚めた少年たちと彼等を求める者たちのコメディ…になる予定。

多分ホラーではありません

読みやすい小説目指して頑張りますので、アドバイスご指摘頂けると嬉しいです(*u_u)

続きはムーンライトの方にて執筆してゆきますm) ; (m
活動報告2010/06/22にリンクがございます

prologue (前書き)

始まり方は暗いですが目指すはライトめな世界滅亡です(爆)

所々シリアスっぽいですが、余り重くならないようにしたいです。

因みにゾンビは出てきません。出てくるのはもっと可愛げがある物体(笑)です(*^ ^)ノ

ちょっと異色なBL作品になるかも…苦手な方はUターンお願いします(; u u)

prologue

「…あ…？」

頭がずきりと痛む。

埃っぽい空気に咳き込みながら身動きすると何故か全身が鈍く痛んだ。

重い瞼を無理矢理開くと薄暗く埃っぽいコンクリート剥き出しの天井が見え、仰向けになりながらはたと首を傾げた。その拍子に後頭部がガリガリ擦れた。痛い。

天井は所々パネルが剥がれ落ちて配線やら配管が丸見えで、時折パラパラと塵が落ちてきている。

電気は通っているらしい。半分落ちかけている蛍光灯が低音を響かせながらばちばちと点滅を繰り返している。

俺は…一体…？

「い、う！…あたたた…」

取り敢えず今の自分と周りの状況を確かめようと肘をついて身を起こすと、全身が軋み、思わず声を上げた。

頭からパラパラと細かい破片が落ちくる。その感覚が気持ち悪くて頭を些か激しく振ると髪の間から更々と細かい砂がサラサラと落ちた。

髪に指を差し入れて思わず顔を顰めた。ざらざらと埃まみれで、よく確かめてみれば頬や手も灰色の砂埃にまみれていた。

頭は相変わらずズキズキと痛んだが全身が砂っぽく…

砂っぽく？

全身が？

寝惚けた頭をリセットして自分の格好をよく見てみて仰天した。覚えもないのに病院で着るような薄手の患者衣…つまり作無衣と言っか浴衣みたいな前開きの服を着ていたのだ。しかもそれ一枚きり。

足元がスースーするし、まるで健康診断を受けてる最中だ。

バリウムを持ってないのが逆に不思議な位のこの出で立ちはかなり心許ない。

「俺…なにやってんだ…？ってか…どこだよ…」

見回してもそこは薄暗い廃墟だ。勿論人の気配なんて微塵も感じない。

せめて破壊される前だったらとも思うが…どちらにしてもこの場所には見覚えがない気がする。

まさに『此所は何処？私は誰？』状態だ。
いやまて俺は…

軽くパニックになりながら深呼吸を一つした。

（大丈夫だ。大丈夫。落ち着いて整理してみよう。…まずは俺の名前。俺の名前は…）

「俺はいおり。あすま、いおり。…ん、字も思い出せる。」

遊馬伊織。うっすら砂埃の溜まる床に指でなぞると下手くそな字が

浮かび上がった。

字を書いて気付いたがどうやら握力が弱くなっているようだ。

まるでずっと動かしていなかったように強張り、芸人が演じる老人のように奇妙なまでに震えていた。

これはどういう事だと思いながら伊織はゆっくり指の曲げ伸ばしをした。

身体を他にも調べてみれば、全身がだるいのは元からだだが、試しに動かしてみれば全身に上手く力が入らない事が分かった。

大分長い間眠っていたみたいな…。

(俺に一体何が…?)

答えを求めて見回し、目に映るのは人の気配のない部屋…。いや、建物全体に人気はない。

周りに奇妙な機器が多く倒れ積み重なったりしているが、なんだか病院と言う訳ではない気がする。

「…廃墟…」

自分の声が暗がりくだまに訝あやまして伊織はぞっとした。改めて人の気配所か生き物の気配すらしない事がリアルに感じられたから。独りぼっちなのだと実感したから。

何故？俺は至って普通に暮らしていた筈なのに。
突然こんな廃墟にいるのはどうして？いつから…？

落ち着かせた思考が再び混乱の兆しを見せて、伊織は自分を掻き抱きながら自分に何が起きたか思い起こそうとした。

(最後の記憶は………ダメだ、…思い出せない……)

ぼっかり記憶に穴が開いている。

しかし何をしたにせよこんな廃墟に放置プレイされる覚えはないのだが。

理不尽な状況に不安と怒りが混ぜこぜになって苛つく。

苛立ちに任せて頭を掻きながら伊織は改めて整理する。

この不完全な記憶の中では自分は至って普通の人畜無害な高校生の

筈だ。

今年18になる。受験シーズン真っ只中で、進学しなきゃとは思いつけど、かといって何か目標がある訳でもなく…

(うん。普通だ。変な所なんてない。)

まさに青春真っ只中。

「…何がどうなって…?」

いくら頭を捻っても答えは出ず、伊織は考えるのを止めた。

何にせよ、こんな廃墟に一人でいるのは精神衛生上よろしくない。先程から曲げ伸ばししていたお陰か、大分力が戻ってきた事だしと、伊織はゆっくり立ち上がった。が、足が、と言うか下半身が全く言う事を聞かず、腰砕けになってそのまま傍のひっくり返ったベッドに突っ込んだ。

「痛っ…」

やれやれと、今度こそベッド（と言つより寝台と言つた方がしっくりくるかもしれない）を支えに立ち上がる。
掴まり立ちしながら足腰の運動も兼ねて足踏みをしていてふと思つた。

（多分この上に寝かされてたんだろうけど…）

床には瓦礫だけでなく小物も大分散乱している事だし…とてつもなく大きな地震でもあったのだろうか。それで、俺だけ逃げ遅れた？
つていうか忘れられた？…見捨てられた…？

「だとしたら皆薄情だな…ってかベッドから落っこちても気付かなかった俺って…」

神経が太いな。

大体目覚めてから知らない場所で独りぼっちと言うホラーゲームや脱出ゲームにありがちなこの状況でも余り恐怖を感じてないし。

(ただ、かなり心細いだけで…)

それと今の状況に至るまでの記憶が全く思い出せない自分に腹が立つだけで…。

「ぐだぐだしても仕方ないか。…外に出よう。で、取り敢えず服探そう。あと人がいそうな避難所か。」

患者衣一枚で下着も靴下も履き物もないのはかなり嫌だ。この格好で他人に遭遇するのも恥ずかしい。身体に異常がないし、心当たりも無いので、こんな格好をしているとまるで自分が変質者になったみたいで気分が悪かった。

大分足に感覚が戻ってきてから、伊織は破片や物を踏まないよう気を付けながら部屋を出た。

右を向くと廊下の先がぼんやり青白く明るくなっていた。

どこかで電気がばちばちとショートしている音を聞きながら伊織は光の方向へゆっくり歩みを進めた

そして、建物から脱出した伊織はここにきて初めて自分の置かれた状況に絶望した。

目の前はまさしく読んで字が如く「ゴーストタウン」だった。

壁や道路に少量ながらも血痕があるのがなんともリアルで鳥肌が立つ。

血溜まりはあれど、人はなし。

生きている人間はおろか死体すらない。

死体がレスキュー隊などに片付けられたとしても、そのレスキュー隊が一人もいないのはおかしいのでは？

と言うか、確かに崩れかかった建物もあるが見渡せばここは高層ビル群のど真ん中。

見覚えもない街だがこれだけの大都市なら人がいない訳はない。

火事場泥棒と言う言葉もあるとおり、災害に紛れて店に強奪に入る市民のイメージが浮かんだ伊織は近くの店を覗いて見るが多くの店が殆ど手付かずだ。

そして、周りは火の手の上がるビルや車も少くない。なのにサイレンの音も車が走る音もない。あるのは何かが崩れる音や小さな爆発音。火が燃える音くらいだ。

もしレスキュー隊や自衛隊が救助活動を終え、市民を根こそぎ避難させ街を離れているのだとしても納得できない。現に要救助者がここにいるのだから。

これだけの被害で運よく死者が出なかったとしても、怪我人は沢山

いた筈だ。道にも建物にも。伊織だけが取りこぼされたなんて、奇妙だ。絶対におかしい。

「まるで某ゾンビ映画じゃないか。」

思わず呟いたが笑えない。もしかして本当に某傘社がウィルスばら蒔いて俺がシヨットガンぶっ放さなきゃならなくなるのか？
だとしたら御免被りたい。

勿論そんな事あるわきゃないと伊織は信じているが。

「取り敢えず、服。そして飯。」

伊織は今度こそ深く考えるのを止めた。分からないのは分からない。考えたって仕方ない。

そう吹っ切って伊織は誰もいなくなった恐ろしいほど静かな街を歩きだした。

当面は衣類と食料の確保が最優先。

誰かに会えれば良い。一人でも、とにかく誰かに会えれば…。

そんな淡く望み薄な希望を抱きながら、伊織の非日常の世界の幕が上がった…

「…と、こんなもんか。」

鏡の前に立った伊織は真新しい服に身を包んでいた。

近くの店に入った伊織は手頃な下着や服を探して手に取ると、律儀にも試着室に入って着替えを済ませた。

誰が見ている訳でもないが、やっぱり気持ちが落ち着かないのだ。

店にあった靴を履き、ついでに鞆も手に入れておく。

売り場を見てみれば、伊織が今着ているのと同じ位の薄手の長袖が半袖が大半で所謂夏物だ。

(一応、替えを持っていくのか。)

これから夏に向かうとすれば薄手が良いだろうと言っことで、伊織は物色しながら適当なものを鞆に詰め込んだ。

「まあ、このゴーストタウン化がどれだけ続いているかにもよるけど……」

数ヶ月続いてるならこの配慮はあんまり意味がない気がする。夏になる所か秋冬に向かう事になるのだから。

因みに今は少しだけ肌寒い。外は少し薄暗く初めは夕方かとも思ったが、先程より空も白み明るくなっているし、どうやら夜が開けてから2時間ほどしか時間が経っていないようだ。

時計を探したが、店にはないようだった。そしてふとある事に気付いた。

「……あれ、なんて読むんだろう……」

店内のポスターや、値段表示の文字が伊織には読めず首をかしげた。街の雰囲気はいかにも日本の都会って感じだったのだが、もしかして外国なのだろうか？

この近代的な街は片田舎に住んでいた伊織のイメージの都会そのものだが、使われているのは日本語じゃない。向かいの店の内装にある文字も、日本語ではなかった。

勿論英語でもない。余り良く知らないが、中国語やハングルでも無さそうだ。

見た事もない形の文字。まあどこことなく日本語に似てなくもないが伊織には全く読めない。

（文字が読めないのはまだ分かるけど…この数字っぽいのもよく分からないんだよね…）

値札を見て大体数字があるだろう場所にそれらしき羅列が見られたが、これも他の言語のようによく分からない。

数字位は大概の国で共通してると思うのだが…。
またも奇妙な疑問が増えて伊織は眉間に皺を寄せながら溜め息を吐いた。

服を詰め込んだ鞆を携え外に出た伊織は改めて通りを見渡した。よく観察すれば、気付かなかっただけで見慣れぬ文字はそこら中に溢れていた。それでも住み慣れた自分の国とそう相違点は見られず、不思議と異国に来たような不安は感じない。

「誰かに会えても…もしかして言葉が通じなかったりするのかな？」

だとしたらかなり嫌だ。授業でやった英会話だってまともにも出来な

かったのに未知の国の人とどう触れ合えば良いんだ？
俺ってばシャイなのに…いやそうでもないか。

因みにこの後、異国の人どころかもっと凄いモノと触れ合う事になるのだが、勿論伊織は知る由もない。

下らない事を考えながら一瞬朝方だから人がいないのかもなんて期待にも似た事を思ったが却って虚しくなった。いくら朝方と言っても7時位にはなってるだろうしいない別けないだろ。

「…そろそろ食べ物探すか…」

そう。現実逃避している場合ではないのだ。現に、服を手に入れた途端安堵したから先程から腹の虫が煩い程に鳴り響いていて仕方ない。

コンビニでも近くにあれば良いんだけど…。

歩き出した伊織は街並みを眺めながら食料が置いてありそうな場所を探した。

暫く歩くと広い交差点に出た。勿論人はいない。なのに、信号だけ規則正しく点灯している様は何だか寂しい。横断歩道を渡り、伊織は何となく左に折れる。

道路脇の建物から前の歩道に目をやり、伊織はぎよっとした。さっ

と何か影が横切った気がしたのだ。
伊織はつられるように咄嗟に走り出した。
今しがた影が入り込んだ様に見えた右手の路地裏に飛び込む。

「…なんだ、猫か…」

そこには一匹の黒猫がいるだけだった。大きなゴミ箱の上に座ってこちらを見てみゃあ、と鳴いた。
近くに寄ると首輪が付いていた。赤い革に金色の鈴がついていて、耳の後ろを搔く度ちりりと音を立てていた。飼い猫だったのだろう。よく人に馴れている。伊織に自ら数歩歩み寄ってきた。

「…人かと思つてちよつと期待したんだけどな…」

人懐っこい猫の喉を搔き撫でてやりながらそうぼやいたが、やっと生き物に遭遇できた伊織は嬉しくて顔が綻んだ。
その背後で不意にカサツと物音がする。

「何だまだ猫か…」

振り向いた伊織は言葉を失った。
今まで穏やかに身を任せていた猫まで驚いて変な威嚇をしながら目にも留まらぬ早さですっ飛ぶように逃げていく。

『ククククル…』

突然、目の前の“それ”は奇妙な音を発しながら伊織に襲い掛かってきた。

「くっくっくうえぎゃあああくっ！！！！？」

伊織は黒猫の二の前になって絶叫した。

…

「っえう、はあっ、はあ…」

伊織は情けない叫び声を上げた後、頭を真っ白にしながら例の物体を蹴り飛ばし全速力で逃げ出した。

交差点まで引き返しそのまま突っ切り手頃なビルに飛び込むとへたり込んだ。

壁に背を付きせえせえと荒い呼吸を繰り返す。

「なん…っだよ、アレ、…っ、反…則だろ…」

伊織は先程のブツを思い出して毒づいた。

このシリアスな状況の中、伊織の前に現れたのはゾンビでも、何かのウイルスによって凶暴化した人間でもなく、はたまたモンスターでもなかった。

いや、或いはモンスターと言えるのかも知れないがアレはもっとしつくりくる呼び名がある。そう、あれは…

「…スライム、だよな、アレ。またはアメーバ…。」

今日日どんなホラーでスライムなんかが出てくるんだよ。
でもすげえ怖かった。大型犬並の物量で目っぼいのあったし。リア
ルに現れると滅茶苦茶怖え…。

スライムなんかどんなRPGでもへボの中のへボだと思ってたけど
目の前にすればアホみたいに怖い。そしてキモい。

(ゾンビならお約束なのになまじ変なの《スライム》に出てこられ
たら諦めもつかねーよ。思わず蹴りつけちゃったし…)

そう言えばアレはスライムと言うにはちょっと硬かった気がする。

「なんかこう…弾力があるというか密度が高いと言うか…ゴムみた
いな…グミっぽかった。表面も水っぽくなかったし。」

蹴った瞬間のあのばいーンとした感触はちょっと気持ち良かった…いや何考えてんだ自分。ていうか一体何なんだアレ？現実にスライムがいるってどういう事だよ。新手の生物兵器か？確かに精神的ダメージはかなり大きいが…眠ってる間に随分世界は様変わりしたもの

だ。

とにかく、もう二度とあんなのに出会いたくは…

ぼたぼたっ

「っ!？」

ここは豆腐やらホテルらしい。そんな豆腐でも良い事に今更気付きながら、伊織はバシバシ嫌な予感を感じていた。

(…まさか、な…)

背後で聞こえた物音に若干、いやかなりビビりながら伊織はぎこちない動きでカクカクと後ろを振り向いた。

『みびよ〜』

「ついぎゃあああ〜つつつ!!」

嫌な勘ほどよく当たるものだ。

振り向けば予想通り例のスライムだ。勿論先程のものとは違うものだろう。

薄暗いロビーの受け付け辺りから、それはそれは自己主張の激しい蛍光色のカラフルなスライムがべちゃべちゃと正体不明な液体を撒き散らしながらこちらに向かって来るのが見えた。

あんまり気色悪いので伊織は軽く目眩を覚えたが、当然倒れている暇はない。

直ぐ様鞆を掴むと脱兎の如く開きっぱなしの自動ドアから外へ逃げた。

『みよ〜』

『かぶかぶ〜』

「うわっ！何で追っかけてくるんだよ…っ」

妙に間の抜けた音 鳴き声だろうか？ を立てながら奴らは物凄い

勢いで後ろを追いかけてきた。

蛍光色のピンクや黄色や緑や水色、兎に角ハデなスライムは互いにぶつかると時折混じりあって何とも言えないカラーリングになったがまた元通りに別れる点、あくまでも色別に単体で形成されているらしい。

『にゅー』

「っ！うわっ」

上から鳴き声が降ってきて、伊織は考えるより先に横へ転がった。上から降ってきたのは毒々しい真っ赤に濁ったスライムだ。伊織から狙いを外した赤いスライムはビチャリと水つぽい音を立てながら平面に伸びたが直ぐ様なだらかな小山型に戻ってこちらを振り向いた。

「っ！」

すぐに逃げようと思ったが、振り向けば既に伊織の退路は絶たれていた。

いつの間にか伊織の周りにはそこら中、色とりどりのスライムで溢れかえっていたのだ。

マンホールの隙間からぬるぬると緑色の正統派なスライムが出てきていたり、ビルの窓をぬらぬらと伝い落ちてくる青い色のスライムがいたり…

皆何だか水っぱい。そして不穏な気配を纏っている。こう、何か、飢えたような気配と言っか…

嗚呼、何だか最初に遭遇したスライムが懐かしい。

あいつは無色透明で弾力もあつたし蹴りごたえも良かった…。こいつらを蹴っ飛ばしたらきつと気色悪いぬるぬるが足にくつつくだろう。

すっかり囲まれてしまった伊織はぬらぬらと徐々に迫ってくるスライムに鳥肌を立てながら、退路を確保しようと手に持っていたバッグを投げつけた。

「うわ！嘘だろっ!?!」

にゆるんと透明なピンクのスライムは自分の中にバッグを取り込むとそれをみるみる内に吸収してしまった。

透明なスライムの中でバッグが中身の衣類と一緒に消えてなくなる

様を見て伊織は戦慄した。まさか街の人間は皆こいつらが…

『みー…ん』

伊織はどこか愛嬌を感じられる鳴き声が急に恐ろしくなった。

(コイツらつぶらな瞳で見やがって人喰いスライムかよ！冗談じゃないぞ…こんな奴らに喰われるなんて…)

「くっ…」

道路の真ん中で伊織はどんどん追い詰められていった。逃げ道を探すが、当然ありはしない。

『みよ？』

「ひっ…」

ついに伊織はスライムの中でもド派手な蛍光ピンクで発光を繰り返すスライムとバツチリ目が合ってしまった。
やばい…来る…！

『にみよ〜！』

「ぎゃああああ！？」

目が合ったスライムは、嬉々として伊織に襲い掛かってきた。

終わった…俺、死んだ…

ぎゅっと目を瞑って踞る。

『クカカカカカカッ！！』

「…っ！……………」

奇妙な音が間近で聞こえ、人生を諦めていた伊織はいつまでも訪れない衝撃に恐る恐る目を開けた。

「あ、お前…」

『きゅるるる〜！』

目を開ければそこには、ピンクのスライムに立ちほだかるように全身を膨張させたスライムがいた。…なんかややこしいな。

その伊織を護るように変な動きを繰り返して威嚇しているスライムは、先程伊織が蹴り飛ばした例の無色透明なスライムだった。

他のスライムに比べなんとも言えない張りや弾力がある。丸い形に固めた硬めのゲルのようだ。

どうやらこの無色透明なスライムがリーダーらしい。高音でけたたましく威嚇らしい音を立てると他のスライム達はすぐすこと後退り

数匹はそのまま逃げていった。

「うわっ」

『きゅるる〜』

スライム達が引き下がったのを見届けた透明なスライムはまるで誉めてくれと言わんばかりに体の端っこをばたばたさせて伊織に寄ってきた。人懐っこい犬みたいだ。心なしかつぶらな瞳がきらきらしている。

「…助けてくれたのか？」

『きゅー』

訊ねると少し縦に伸びてこくこくと頷く。随分人間くさい仕草をするスライムだ。

こいつは無害なのだろうか？だが一応用心して伊織は傍にあった街路樹の枝を拾って突っついてみた。

ばいんばいんとかかなりの弾力だ。枝は先程のバッグのように溶けたりはしなかった。つつかれたスライムは心なしか撥ったそうだ。

「…ありがとう。助かったよ。」

『みゅーっ』

ぺちちちち

尻尾？を道路に叩きつけてとても嬉しそうだ。何だか伊織もこの状況に大分馴れたのか可愛く見えてきた。随分ほだされたものである。

嬉しそうに無意味に伸び縮みするスライムを伊織は指先で突っついてみた。

『みゅーっ』

「じゅわっ」

ぶるぶるの無色透明なスライムは嬉しそうに伊織の足にすりよった。ぞわわ〜っときつつも、一応命の恩人（？）でもあるので無下に出来ないのが恨めしい。

「わ、悪かったな、さっきは蹴っ飛ばしたりして」

『んみゆ〜』

意味を理解しているのかいないのか、する〜と足から肩まで這い上がったスライムに伊織は「調子にのんな」と目にも留まらぬ手刀を繰り出した。

これが、スライムと伊織が初めて遭遇し、触れあった日の一部始終である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3000/>

RELIEVER

2010年10月9日03時58分発行